蜃気楼

内田康夫

蜃気楼（しんきろう）
内田康夫（うちだやすお）
© Yasuo Uchida 1999

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1999年7月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
販売部（03）5395-3626
製作部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——凸版印刷株式会社
製本——株式会社国宝社
株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。（庫）

ISBN4-06-264611-0

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

江苏工业学院图书馆
藏书章

蜃気楼

内田康夫

講談社

蜃気楼

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

目次

プロローグ――7
第一章　魚津埋没林博物館――17
第二章　「売薬さん」ごっこ――66
第三章　丹後路の旅――107
第四章　レインボーブリッジ――160
第五章　第三の犠牲者――233
第六章　こわれた夢――282
エピローグ――344
自作解説――348

プロローグ

大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立

百人一首に収録されている、平安の女流歌人・小式部内侍の詠んだ歌である。高宮明美はこの歌が大好きだ。もちろん、自分が住む大江町の名所を歌ってくれていることもあるけれど、この歌にまつわる、作者の才気煥発を伝える、小気味よいエピソードにも心ひかれる。

小式部内侍の父親は和泉守橘道貞、母親は美貌と華やかなラブストーリーと、そして何よりも歌人として有名な和泉式部である。

和泉式部は橘道貞と離別後、藤原保昌と再婚して、夫の任地である丹後に住んだ。ひとり都に残り、宮中に出仕している小式部内侍は、現代風にいえばまだ少女といってもいい年頃だが、歌の才能は母親譲りと評判であった。しかし、やっかみ半分、親の七光を勘繰る人間

も少なくなかった。

宮中で歌合があったとき、藤原定頼という人物が意地悪く、「お母さんに作ってもらった歌は、もう届きましたか」と冷やかした。それに対して、小式部内侍がその場ですぐに詠んだのが冒頭の歌とされている。

「大江山生野」という地名と、「行く」という言葉がかけてある。そこへ行く道はあまりにも遠いので「まだ踏みもみず」――「まだ文も見ず」、つまり、母親のいる天の橋立まで足を踏み入れていないし、まだ手紙も見ていないというのである。これには定頼もギャフンとなっただろうし、周囲からはやんやの喝采が浴びせられたにちがいない。

この歌のエピソードがあるせいか、とかく保守的といわれる丹後地方の中にあって、大江町は比較的、女性が大切にされているという。明美が勤める町役場でも、男性職員は総じて女性に対して親切だ。明美が産業振興課商工観光係の内勤から「日本の鬼の交流博物館」への異動を命じられたときも、上司は、「無理言うて、すまんけど」と、ずいぶん遠慮がちに切り出したものだ。

大江町は京都府北西部、丹後半島の付け根近くにある小さな町だが、信州の軽井沢町ほどではないにしても、日本中で上から何番目と数えられるほど、「町」としてはよく名が知られている――と明美は思っている。その所以は「大江山の鬼伝説」があるからだ。全国に数多くある鬼伝説の中でも、やはり大江山の酒呑童子がピカ一だろう。

大辞林によると、「おに――鬼」とは〔1、（天つ神に対して）地上の国つ神。荒ぶる神。2、人にたたりをする怪物。もののけ。幽鬼。3、醜悪な形相と恐るべき怪力をもち、人畜に害をもたらす、想像上の妖怪。〕とあり、その他、夜叉、羅刹、餓鬼などを挙げ、さらには、〔牛の角を生やし、虎の皮のふんどしをつけた姿で表されるのは、陰陽道で丑寅（北東）の隅を鬼門といい、万鬼の集まる所と考えられたためという。〕と書いてある。また〔放逐された者や盗賊など、社会からの逸脱者、また先住民・異民族……などの見なれない異人をいう。〕とも書かれている。

そのほか、大辞林に紹介されている鬼の定義づけや解釈には、まだまだいろいろの要素があるが、明美はその中で「社会からの逸脱者、先住民」という部分にとくに関心を惹かれた。

おとぎ話や物語に出てくる「酒呑童子」というのは、大江山に棲み、人里や都に出ては凶暴な悪さをする恐ろしい鬼で、悪逆非道のかぎりを尽くしたあげく、源頼光や坂田金時（金太郎）などに退治される――ことになっている。

しかし、それは為政者側の都合で書かれたでっち上げで、真相はそんな単純なものではないらしい。

本来の酒呑童子は比叡山の童子（稚児）だったが、当時の仏教の教義に不満を抱き、京都を出て大江山に籠もって反抗したために、都の軍勢に討たれたという。また、都で評判の池

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

田中納言の息女「紅葉姫」が行方不明になり、陰陽師の安倍晴明が「酒売り長者の酒呑童子の仕業」として、帝に讒言し、帝が頼光に酒呑童子を討つように命じたという異説もある。

丹後や隣の但馬には、酒呑童子のほかに、陸耳御笠（土蜘蛛）、英胡、迦楼夜叉、土熊（いずれも鬼）といった、鬼や妖怪の伝説が数多くある。それだけ、この地方には都に対抗する勢力や、朝廷の意のままにならない部族が存在していたという証拠であり、酒呑童子はその代表的なものだったにちがいない。

都の為政者に鬼のように恐れられ、極悪人のように描かれた酒呑童子は、じつは正義感の強い、女性に優しい男だったのかもしれない。そう思うと、不当な弾圧を受けて殺された鬼たちに、同情したくなるのである。

その鬼たちの人権（？）と名誉回復を願うとともに、せっかくある酒呑童子伝説を大江町の観光行政に役立てない手はない――という考えから生まれたのが「日本の鬼の交流博物館」である。

本来世の中に忌み嫌われる鬼の伝説を逆手に取って、観光行政の目玉にしようという活動は、それまでにも大江町の基本方針として推進してきたのだが、それがここ数年、急速に加速された。全国の鬼瓦を集め「大江山鬼瓦公園」を作ったのを皮切りに、「鬼の回廊」「昭和の鬼展」「鬼のヒューマンネットワーク」等々、鬼ずくめの企画をつぎつぎに繰り出した。

その極めつけが日本の鬼の交流博物館というわけである。ただし、ネーミングがあまり長

いので、通常は「鬼の博物館」、さらに縮めて「オニハク」と呼んでいる。

鬼の博物館は役場のある町の中心部付近からだと車で二十分ほどの、大江山登山口近くにある。さすがに人里離れたという感じもしないではないが、施設そのものは近代的な建築で、冷暖房完備。居住性という点では完璧といっていい。役場の周囲の連中が気の毒がったほどには、明美は博物館勤務が苦にならなかった。

博物館は、非常勤の館長を除くと、常勤は高宮明美ともう一人、鳥山朋子という雇員の資格の、明美よりずっと年長の女性職員だけ。ちょっと寂しいが、ウィークエンドには入館者でかなりの賑わいになる。

近畿圏ばかりでなく、ずいぶん遠方から来たお客や、観光バスの団体客が入ることもある。博物館での仕事は、チケットを売る窓口にいるほかは、展示品の説明をしたり、お客の質問に答えたりするのが主だが、いろいろな地方の人と接触できるのは、それなりに楽しいものだ。

ところで、大江町を訪れる観光客――ことにお年寄りの中には、「戦友歌碑」を訪ねて来たという人が意外に多い。戦友歌碑は大江町役場前で国道を北に逸れる道に入って、およそ五百メートルほどの右手にある。明美の勤め先、鬼の博物館へ行く途中だ。この道をさらに行くと、峠を越えて宮津市内に入ってゆく。商工観光係に籍がありながら、役場の中で事務を執っているときには、明美はあまり詳しいことは知らなかったが、博物館に通うようにな

って、町の名所に興味が湧き、それまで見向きもしなかった戦友歌碑などにも、時折、立ち寄ることがあって、そこに佇む老人の姿を何度となく目にした。

大江町には酒呑童子の大江山しかないように思われがちだが、元伊勢内宮皇大神社などの名所旧跡が少なくない。若い明美などにはぴんとこないけれど、町の年寄りたちに言わせれば、戦友歌碑はその中でも特筆すべきものだという。

「戦友」は、半世紀前に日本が戦争に負けるまでのあいだ、もっとも多くの人に、もっとも長く歌われた軍歌のひとつといっていいのだそうだ。明治時代、日露戦争の直後に作られたが、「ここは御国を何百里／はなれて遠き満洲の／赤い夕日に照らされて／友は野末の石のした」で始まり、えんえん十四節におよぶ長い歌詞の作者、真下飛泉は、河守町の新町（現大江町）で生まれた。

「戦友」はジャンルとしては軍歌に分類されているが、哀切きわまりない歌詞の内容や、憂いを帯びた短調のメロディを聴けば、これが単なる戦意昂揚を目的とした、いわゆる軍歌ではないことが分かる。きのうまで一緒に戦場を駆けていた戦友が、いまは物言わぬ亡骸となり、故国の母親へ送る遺品の時計だけが、コチコチと動いているのが情けない――という、戦友の述懐そのままの詩は、むしろ反戦歌といっていい。いや、好戦反戦を問わず、戦争の虚しさを慨嘆する人間の本音が歌われている。

戦友歌碑を訪ねて来るのは、大抵が七十歳過ぎの老人である。団体や何人か連れ立って来

ることもあるが、一人でひっそりと訪れる人も少なくない。むろん歌碑だけが目的でなく、鬼の博物館を見学するついでや、さらにいえば、この先の天の橋立見物の途中、寄り道するケースが多いのだろう。それにしても、その年代の老人たちの多くが、戦争の経験があり、戦場で友の死に立ち会った記憶を抱いているということだ。それを思うと、戦争を知らないどころか、遠い歴史としてしか認識していない明美の胸にも、重い憂愁が垂れ込めてくる。

その日の昼少し前、博物館を訪れたお客の中に、明美が出勤途中、戦友歌碑の前で見かけた老人がいた。通りすがりにチラッと見ただけだが、たしか、歌碑に向かって黙禱を捧げていたように思えた。そのときも一人だったが、チケットを買って入館した老人は、やはり一人であった。

しばらくのあいだ、館内には二十人近い客がいた。グループで来ているのがほとんどで、アベックが一組のほかは、例の老人だけ。グループの客は賑やかに慌ただしく引き上げて、広い館内は閑散とした。

日本の鬼の交流博物館は名称どおり、日本中の鬼にまつわる造形物——絵画、彫刻、お面、人形、玩具のたぐいから、地方地方に伝わる風習、祭り、芸能等、ありとあらゆるものを集めて陳列してある。各地で生産された鬼瓦も面白い。それほど広くはないけれど、一つ一つ子細に見て歩くと、けっこう時間がかかる。

老人はよほど興味があるのか、それともよほど暇を持て余しているのか、ゆっくり時間を

かけて館内を歩く。

明美はチケット売りの窓口を鳥山朋子と交代するまで、展示ホールの片隅に佇んで、案内係を務めていた。その明美の前まで来ると、老人は足を停め、前かがみにしていた腰を伸ばすようにして、明美に笑いかけた。

「去年来たときより、展示品がだいぶん増えていますな」

「え、ええ、少しずつ増えてます」

明美は反射的に答えた。「二度めですか」と訊きかけて、やめた。先方がこっちを憶えているとしたら、失礼なことになる。その代わり、「さっき、戦友歌碑のところにいらっしゃいましたね」と言った。

「ほう、そしたら、見ておられたですか」

老人は照れたように顔をしかめた。七十歳はとうに越えている年恰好に見える。どこから来たのだろう、関西風の訛りとは少し違う言葉つきだ。

「お客さんも、やはり戦争へ行かれたことがあるのですか？」

どうでもいいことだが、多少、お愛想のつもりで訊いた。

「行きました。よう無事に帰って来られたもんです」

「じゃあ、亡くなられた戦友の方もいらっしゃるのですか？」

「ああ、大勢おります。五十年も経つのに、忘れられんですなあ。戦友の歌を歌うと、いま

でも涙が出るのですよ」

悲しげに微笑んで、「タクシーが来とるかな?」と腕時計に視線を落とすと、慌てた様子でロビーを抜け、玄関の方角へ向かった。ちょうど、駅前タクシーが迎えに来る約束の時間だったらしい。

明美が何気なく見送っていると、老人は玄関を出たところで、駐車場のほうから来て、これから入館しようとするらしい女性と出会った。女性は後から来る連れを待つのか、玄関前で振り向き、佇んでいる。

老人はタクシーを待ちながら、女性の顔を無遠慮とも思える目でしげしげと眺めていたが、やがて、我慢ならないといった感じで何か話しかけた。

ドアの外だから、明美の耳には会話の内容は切れ切れにしか届いてこないが、話しかけられたほうの女性にとっては思いがけない出来事だったようだ。驚いた素振りを見せ、迷惑だが仕方ないといった様子で相手をしている。老人は嬉しそうに、身振り手振りで、たぶん声高に話すのだろう、女性のほうはますます困惑ぎみに、駐車場のほうに目を向けたりしながら、話を切り上げるタイミングを計っているように見えたが、老人が名刺か何かを渡したのを汐時のように、小さく会釈して、老人に背を向け、玄関ドアを入ってきた。

老人は少し間の抜けたような顔で女性を見送っている。

女性はロビーに入り、チケット売りの窓口で「二人」と言った。鳥山朋子がチケットを渡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton